ひびき

Gifu Symphony Orchestra

We Love Music

公益社団法人　岐阜県交響楽団
〒501-3133 岐阜市芥見南山3丁目7の10
TEL〈058〉244－0150　FAX 244－0151
ホームページ http://gikyo.ktroad.jp/

七十周年に想う

公益社団法人岐阜県交響楽団
理事長　矢橋　修太郎

岐阜県交響楽団は、お陰様で今年、創立七十周年を迎えることができました。人生に例えても七十年というのは、それなりの長さであります。アマチュアにもかかわらずこんなに長い間活動を続けて来られたのは、県、市はもとより会員の皆様方、役員、団員など多くの方々の絶えることのないお力添えがあったからです。深く御礼申し上げる次第です。

我が楽団の源は、今から七十年前＝昭和二十八年、当時岐阜大学の宮崎直一教授の声掛けによる学生＋社会人の小さなオーケストラでした。呱々の声をあげて以降、さまざまな曲折を経ながらも今日まで来られたのは、偉大な功労者がおられたからでした。それは前期まで理事長であられた岡本太右衛門様であります。岡本様は、二十六年間に亘って理事長を務められ、副理事長時代を含めると三十有余年当楽団の発展に力を尽くされて来ました。その根底には強力なリーダーシップがありますが、その具体例を掲げて敬意を表したいと思います。

何よりも音楽をやりたい、音を出したいという団員の一番の願いは、発表の機会以前に団員皆が揃って練習ができる場所の確保です。あちこちの施設に間借りして肩身の狭い思いで練習していた団員の姿を見かねて、理事長ご自身先頭となって資金集めに奔走され、ご自身の土地までも提供され、平成十年に立派な練習場を完成させられました。この建物はまったくのプロ仕様の素晴らしいもので、このような専用の練習場を持つアマチュアオーケストラは他に類がありません。この練習場のお陰でどれ程団員のやる気が鼓舞されたかは容易に想像がつきます。その結果として個々の技術や全体のアンサンブルが大巾に向上したと聞いております。

一方、アマチュアの集まりですから、団員の思いを一つにするのはなかなか難しい。そこで岡本様は、節目ふしめのタイミングに県外に出て優れたホールで演奏するという目標を掲げられました。その最初が、五十周年の節目の東京サントリーホールでした。会員や関係者のご尽力でほぼ満席の会場での演奏は、団員や我々に強い感動を与えてくれました。

二回目は五年後にウィーンに飛びました。お正月のTV中継で有名なムジークフェラインザール（楽友協会）での公演でした。プロでも中々立つチャンスのない会場での演奏によって楽団全体の一体感がこれ以上なく高まったことは容易に想像出来ます。このように楽団を一つにまとめ引っ張って行くという素晴らしい功績を上げられました。

実は岡本様はウィーンの次の計画として世界で一番有名なホール、ニューヨークのカーネギーホールへの演奏旅行も計画されました。関係者のご努力で契約まで済ませましたが、コロナが猛威を振るい、事前の打合せに現地へ出向くことも難しくなり、団員一同涙をのんで諦めることになりました。

本日の公演はその悔しさを乗り越えての演奏です。大垣出身の若手ヴァイオリニストのホープ辻彩奈さんも演奏されますので、十分にお楽しみ頂きたいと存じます。岡本様のあとを承った私は浅学菲才の身でありますが、名誉理事長が築き上げられた伝統を更に発展させるべく「岐阜に岐響あり」を内外により一層広めて参る所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（矢橋大理石株式会社
代表取締役社長）

井崎 正浩先生インタビュー

2年前の第96回定期に続き、記念すべき70周年の定期演奏会を指揮していただく井崎先生にお話をお伺いしました。

今回井崎先生には、岐響70周年の演奏会を指揮していただきます。

指揮者としてオーケストラに呼んでいただくとき、それはご縁だとか、いろいろな繋がりがあって、そういうチャンスが巡ってくることはあると思います。だけど指揮者にとって何が一番大事かというと、リピーターとしてまた次に呼んでいただけるかどうか、ということなんです。しかも今回、70周年記念という大きな演奏会に呼んでいただきました。そういった特別な演奏会というのは、オーケストラはどこでも、やはり自分たちが一番気持ちを入れる演奏会ですから、それなりの曲、共演者を準備して演奏会に挑みたいと思うのが普通ですよね。そんな特別な演奏会に呼んでいただけるというのは、指揮者にとって名誉以外の何ものでもないです。しかも前回呼んでいただいた時がついこの間で、こんなに早い機会に呼んでいただけるというのは、非常に光栄なことです。

オーケストラとの関係は、2回3回と続くうちにお互いの気心が知り合い、もっとより深く、より広く音楽に関して、人間的な付き合いが出来てきます。ですので、今回呼んでいただけることはそういう意味においてもとてもうれしいですね。

初めての来団時の印象はいかがでしたか？

岐響の場合は、それまで様々な指揮者と様々な曲を様々な場所でやってらっしゃるから、そういう意味ではすごく経験と経験値が高いオーケストラだと感じましたね。指揮者とのやり取りもよそのオーケストラなんかに比べても、割と慣れてらっしゃる。常にいろんな指揮者がいらっしゃるから、その趣旨に合わせていろいろな対応が出来そうだと感じました。

でもやはり皆さんがどういう音楽性とか人間性を持っているかということを早く知りたいので、どれだけ早く仲良くなれるかというのは肝ですね。だから割と短いスパンでまた岐響を振ることができたのはそういう意味でもよかったです。

その後、練習を進められていく中で、変化や気づかれたことはありましたか？

オーケストラはもちろん、指揮者が来て、演奏がどんどん変わっていくわけです。だけどそれは変わっていっているのではなくて、本来持っていて、出てきてなかったものが出るようになったということだと思います。指揮者の仕事は、皆さんからたくさんの潜在能力だとか、基本的なスキルを引っ張り出すことできるか、です。

指揮者によっては、どこのオケへ行っても同じサウンドを作ろうとする人もいます。でも僕の場合は、そのオケに行ったらそのサウンドや色々なものは違わなきゃいけないと思うんです。

そしてそのオケの考えと指揮者の考えが合致すればこんないいことはないですよね。だけど指揮者ってほら、もうみんなそうなんだけど、自分であやりたい、こうやりたいって我がままなのが多いから(笑)ここで急にテンポを早くしたいとかね。やっぱりそこに指揮者が一人の音楽家としての考えを出すわけです。

だけど、だけど！　一番大事なのは、それを音に出すのは最終的にはオーケストラなんです。

だから、演奏する人が納得をしていないと、無理やりやらせていい音出るわけないじゃない。面白いなとか、これやってみたいなとか、そういう意欲を持ってもらうことによって、音が出たときに、「あ、違う音がした！」「あ、面白かった！」と。

前置きが長くなったけど、それが特に前回のドヴォルザークで、変化が大きかったんです。特に2楽章とか。指揮者の解釈によって、演奏に対する向き方、音楽に対する考えが変わったときに、演奏する人から出る音がどう変わるか。そこが問題なんですよ。指揮していて、「こう来たか！」っていうね、そう来るんだったらこうやってみようかっていうね。そしてもっと面白いのは、本番。ふっと思ったインスピレーションだとかを皆さんに提示したときに、オケの側から「あ、そうくるのね。」とか「あ、こうやるんだ。」とか、その瞬間にぱっと切り替わって、本番でしかできないことがある。勿論それは練習でやってきたことの延長上にあることですけど、それができてうまくいった時って、こんなうれしいこと、こんな楽しいことはないです。これライブの醍醐味ですね。それが前回の本番では凄くあったので、僕にとっても記憶に残ってる演奏会だったんです。

今回のプログラムのこと、どう見ていらっしゃいますか？

まず、岐響の演奏会を芸文でやるということ。オーケストラもいっぱいある名古屋で、しかも名古屋の芸文で演奏会をやるということ、これは岐響としては〝打って出る〟っていうことだと、僕はそう思いますよ。だから、そういう意味で、まず「これが岐響だ」っていうのを出すには、やっぱり團先生のこの委嘱作品っていうのが、もうこれ以上強いものはありません。

そしてマーラーは、やっぱり演奏する人数も多いし、大規模な曲だし、大きなホール向きだし、それにこれまで皆さんもいろいろやってきてるから、そういう意味ではもう、いわゆる記念な演奏会としては、ふさわしい曲ですね。

プラス、それに合わせた曲がコルンゴルトです。この曲がマーラーと同じ時代の曲ということだけではなくて、やっぱりちょっとチャレンジある感じがする。岐響が地元ではなく全然違うところに打って出るというのは、ある意味、オーケストラがどういうプログラムを演奏するか、それを誰と演奏するのか、によって、その演奏会の姿勢というものを、僕は暗に提示してるんだと思う。だからそこに、今回の岐響のポリシーというかテーマというか、コンセプトというか、それが全てこの3曲に集約

されてると思います。

團伊玖磨　交響詩「長良川」について

團先生の曲では、過去にも「夕鶴」をやったことがあるし、歌曲の伴奏をしたこともあります。日本歌曲もいっぱい書かれていて、日本人としての古い良いものを持ち続けてらっしゃる方なんだけど、でも本人が目指されてるものは、もっとモダンな感じなものだと思いますね。例えば、「長良川」の部分部分で、ちょっとヤナーチェクみたいな響きだったり、2楽章はむしろイタリアのレスピーギとか、もっと近代の映画音楽、例えばモリコーネとか、そういう色々な人の影響を受けてらっしゃる。それが端々に見えたりします。演奏する皆さんにとってはメロディーやリズムに近しいものを感じると思いますが、それをまた新たに"楽譜から感じる"ということが、皆さんにとってちょっと新しいことかもしれないですね。ですので、その皆さんと私のコラボレーション、今まで出たことない魅力をお客さんに伝えたいなと思います。

コルンゴルト　ヴァイオリン協奏曲について

これはもうとにかく、辻さんが来て全て解決してくれると（笑）

コルンゴルトは本当に天才だった人で、オーケストレーションがものすごい。楽器の重ね方でも例えば、オーボエとホルンが重なるときと、オーボエとフルートが重なるときと、雰囲気が全然違う。和声も、このメロディーにこの和音が来るのかって。それが多分、これまで皆さんが感じたことがない和音が、オーケストレーションが出てくるので、この作曲家しかない響き、サウンド、それを出したいなって個人的に思っています。

それとやはり、コルンゴルトのある曲がスターウォーズそっくりなのは知られていて、今でこそジョン・ウィリアムスって凄いってことになってるけど、実は元ネタがそこにあって、ジョン・ウィリアムス自身もコルンゴルトを尊敬している。だから、大衆受けするっていうか、聴いた人にものすごいインパクトを与えられる要素を、このコルンゴルトという人は天才的に持っているから、そういうところを何か引き出せないかなとも思います。

マーラー　交響曲第1番「巨人」について

どの作曲家もそうだけど、例えば一番最初の交響曲第1番っていうのは、意気が入るわけです。もう最初の交響曲だから。そうすると最初の響きは宇宙の響きでしょ。なんていうかも、えも言われないというか。

私にとっては、ブラームスとベートーヴェン、そしてマーラーの3人の作曲家は、年代によって自分を映し出す鏡だと思ってる。今までこんなふうに思ってなかったのに、今演奏してみると、あれ、こっち側のテンポの方がいいやとか、その変化が多い作曲家なんです。マーラーで一番最初に振ったのが第1番で、その頃からしてみれば、もうやっぱり何か自分の信条というか、それまでの指揮者としての、というか人間として年を重ねていって、この年代になって初めて、これはこんなことだったんじゃないか、と思えるところがあるわけ。今回、岐響でマーラーの第1番と言われた時に、これはもう神様のプレゼント、ご縁だと思いました。ここでこの曲をやってくださいって言われるのは、私にとって、もうお神から、そういうタイミングだからしっかり勉強してね、って言われてる気がするんです。なので、これは一期一会の演奏になるなと、そう思っています。

▲岐響練習場にてマーラーを指揮する井崎正浩先生

最後に、先生が指揮者になられたきっかけ等、何かエピソードをお伺いしたいです。

大学3年のときに、文部省の給費をもらって、1年間ウィーンの音楽大学に留学させてもらったことがあります。

自分は福岡の教育大学の音楽科出身で、音大には行ってなくて、地元で通えるとこへ通っていました。音楽の専門家になろうとか、先生になりたいわけでもない、音楽の基礎も出来てないし、とか思いながらも、「音楽をやりたい」っていう気持ちはすごく強かった。ある時、ある先生に薦められて、その留学の募集に応募したら受かっちゃった。だからといって簡単にウィーンに留学させてもらえるわけではなくって、だってウィーンの国立音楽大学だよ！あなたは何が出来るんですか、ピアノどのくらい弾けるんですか、作曲どのくらいできるんですかって。教育大学で学んでいます、というのでは入れてくれないじゃない。だからもうごり押しで合唱指揮、みたいな形で入れてもらうことになったわけ。合唱指揮科っていうのは、作曲家と指揮科とその三つの科が3年生までは一緒に勉強しないといけない。だからそこでオーケストラ指揮を始めて、初めてそこで指揮者なりたいと思ったんです。

そして民音の指揮のコンクールがあった時のこと。そのコンクールに参加するためには、自分の習った先生の推薦書、要するに経歴を出すでしょう。そうすると、それで撥ねられる。音楽大学出てないから。それでビデオ送るでしょ、それも突っ返される。でもその民音で突っ返されたビデオをブタペストへ送ったら、コンクールの受験資格が出来た。それで、ブタペストに行ってコンクールで優勝した。

自分からそうなりたいっていうよりも、そもそも音楽に進むことになったこと自体も、その時々のタイミングで何かエポックメイキングなことがあって、それで何か導かれるように、その道に進んでいました。だから、そういう人たちのおかげで今の私がある、そう思いますね。

お忙しい中、貴重なお話をたくさんしていただきましてありがとうございました。

インタビュー　ob　坂　綾香

辻彩奈さんインタビュー

本日お迎えしたヴァイオリン奏者の辻彩奈さんは、岐阜県大垣市のご出身です。岐阜県交響楽団とはご縁がありまして…。今や世界でご活躍の辻さんとは高校生の時、3回共演しています。今回ご出演頂いた思いや曲に対する事など、お話を伺いました。

今回の岐響70周年記念公演にご出演頂いた思いや、岐響に対する思いをお聞かせください。

岐響の皆さんと初めてご一緒したのは10年前になります！！！(◎ー◎) 今回で4度目の共演ですね。創立70周年記念という節目の演奏会にてお声がけ頂いたのは、とても嬉しく光栄に感じています。岐響の皆さんは、いつも音楽を楽しんでいらっしゃるのが印象的です。今回も一緒に楽しく音楽を作り上げていけたらいいなと思っています！よろしくお願いします。

コルンゴルトについて、ご自身の感想やイメージ、聴き所などお聞かせください。

コルンゴルトのヴァイオリン協奏曲を演奏するのは、この岐響での演奏会が初挑戦になります。小さな頃に、ハイフェッツの音源を聴いた時からずっと憧れの曲でしたので、この曲に取り組めることが決まった時からとてもワクワクしていました。岐響との共演がコルンゴルトに決まったあとに御縁があり、9月に広島交響楽団、11月に神奈川フィルでも演奏することになっています。

コルンゴルトはオーストリア出身、幼少期より「神童」として注目された存在でユダヤ人でした。第二次世界大戦でナチスの脅威が増していく中、彼はアメリカに亡命し、映画専門の作曲家として働き、大戦中は映画音楽しか書かないと誓って仕事をしていたそうです。そして終戦後、ようやくクラシック音楽の作曲に集中できる環境になり、高まった想いをぶつけて最初に書いた作品が、この「ヴァイオリン協奏曲」だそうです。マーラーの奥様であるアルマ・マーラーに献呈された作品です。とても優美で官能的で、ドラマティックなメロディが特徴な作品です。曲中に映画音楽のモチーフが使われていることもあり、ハリウッド映画音楽のゴージャスさのようなものも魅力かなと思います。3楽章になると軽やかな主題が変奏されていき、ソリストはものすごい超絶技巧を求められます(笑)テンポも速いですし、技術的にすごく大変な作品ですが、鮮やかな演奏ができるようにがんばります！！華やかなオーケストレーションも聴きどころです。近代作品はなかなか難しい印象がある…という方も多いかと思いますが、この曲はとても美しくロマンティックな曲ので、きっとお楽しみいただけると思います！

▲インタビューを受ける辻彩奈さん
提供：KAJIMOTO

現在どのような活動をされているのかお聞かせください。

2020年2月中旬までパリに留学していましたが、ロックダウンの直前、大阪フィル定期演奏会があったので帰国し、悩んだ結果、そこで留学を中断しそのまま日本で過ごすことを選びました。そこからの2年間は、外国人のアーティストが来日できない状況が続いたので、おかげさまでコンチェルトの代役のお話をたくさんいただくことが出来ました。元々、2019年後半からコンチェルトのレパートリーを増やしていく計画をマネジメントと相談して遂行していたのも功を奏し、レパートリーの拡充に繋がったと思います。ただし、代役のオファーをいただいてから初めて取り組む曲もありましたし、本番まで1ヶ月で仕上げなければいけない代役機会もありました。結果としては、そこを逃げずに取り組んだことは、本当に大きな財産になったと感じています。

昨年からは、リサイタルにも力を入れて取り組んでいます。ヴァイオリン・ソナタのレパートリーも徐々に増えてきて、様々な共演者の方とご一緒する機会に恵まれました。特に印象に残っているのは、フランクのソナタをマルタ・アルゲリッチさんと3回共演したことです。彼女の音を一番近くで聴き、彼女の音楽を間近で体感できた最高の経験でした！！！音楽が生まれてくる瞬間を楽しむことがどれだけ重要なのかを教えてもらった気がして、私の音楽人生において胸に刻むべく大切なことを学べた、素晴らしい時間だったと思います。

今後益々ご活躍されていかれる中、どのような演奏を目指していくのか今後の活動も含めてお聞かせください。

現代作品を躊躇することなく、取り組んでいきたいです。名曲として今までずっと残っている素晴らしい作品を演奏するのはもちろん、この時代に作られた作品を積極的に演奏し、お客様にたくさん知っていただきたいと思います。ただ、多くの方々に現代音楽を触れて頂くには演奏家側の新たな創意工夫も必要だと感じています。日本だけでなく世界での演奏機会をもっと増やして、様々なことを経験して吸収し、これからも頑張っていきたいです！

ありがとうございました

岐響の歩み～70年を振り返る

岐阜県交響楽団年表

1953年（昭和28年）9月30日／岐阜大学教授・宮崎直一氏により「岐阜交響楽団」として発足

1957年（昭和32年）／第一回定期演奏会を開催

1960年（昭和35年）／正式な二管編成の交響楽団となる

1967年（昭和42年）1月／練習場を岐阜大学学舎より岐阜商工会議所に移転、新組織にて再開

2月／練習場を岐阜県立図書館に移転

1970年（昭和45年）11月～72年（昭和47年）5月／一時演奏活動中止、その後岐阜大学管弦楽室にて活動再開

1975年（昭和50年）3月／社団法人設立、初代理事長に佐久間禮三郎氏就任　名称を「岐阜県交響楽団」に改称

1976年（昭和51年）7月／岐阜市の委嘱作品で、社団法人設立記念として、團伊玖磨氏に交響詩「長良川」を委嘱・初演

1978年（昭和53年）頃　事務局を加納小学校に移転、練習拠点を岐阜市南市民会館に移す

1984年（昭和59年）4月／岐響の育成団体、「岐響ジュニアオーケストラ」の発足

ご支援に支えられて迎えた70周年

トレーナー（昭和50年入団）　田中　陽治

「岐阜交響楽団」との出会いは、入学して所属した岐阜大学管弦楽団が土曜練習を終えて暗くなった頃に、知らない人達が旧長良キャンパスの管弦楽室に集まり始め、夜遅くまで練習する様子に接した時でした。ちょうど「市民による初の第九」が行われた年で（全国の第九ブームの先駆けでした）、入学時、声楽にも多少未練があった私は合唱団員として本番で歌った…、それが岐響とのつながりの始まりです。昭和49年のことでした。

その後コントラバスを専攻して師事した、N響を定年退職された先生の「音楽の先生をやりながら、土日はオーケストラ活動に取り組み、生涯学び続けなさい。そして人々に音楽の喜びを。何と素晴らしい人生か！」との言葉に心動かされて岐響に加わり、以来五十年間近く、結婚した同級生の妻と共に演奏活動を続けてきています。

翌年、岐響は社団法人となり、名称も「岐阜県交響楽団」に変更。練習会場は岐阜市南部の加納城趾にあった南市民会館、今で言えばコミュニティセンター集会室のような部屋に移りました。が、法人の事務局兼楽器置き場は約百m離れた加納小学校の一室を間借りしていたため、打楽器の移動が毎回必要で、雨が降ればみんなで傘を重ねて濡れないように運搬。しかしそうしたことが、ともに音楽活動に取り組む仲間意識を高めてくれていた気がします。

その後、支援者の皆さまのご尽力で、柳ケ瀬東部の山麓にあった旧岐阜ボウリングセンターの内部を大改装いただいて練習場に。ボウリングレーンの奥に向かって天井が低くなっていて、「出した音が暴れまくる」傾向はあったものの、専用というありがたい環境の中で演奏の質を高めようと、十年間近く練習を積み重ねました。

しかし建物の老朽化と一帯の都市計画によって離れざるを得なくなり、今度は柳津の岐阜流通センター内の建物5階の部屋をお借りしての練習が始まります。広くて天井が高く、床は厚いカーペットで音を吸収しやすい等の難しさもありましたが、落ち着いた雰囲気の中で練習させていただきました。

その後、建物の再利用に伴い、岐阜市東部コミュニティセンター大集会室を主要打楽器の保管も含めて優先的に使わせていただくことになるのですが、ここで練習を重ねる間に全国でも例のないアマチュア専用練習場の建設が始まります。当時の岡本理事長（現名誉理事長）の私有地に、多くの支援者の方々からいただいた多額のご寄付により立派な練習場を建てていただきました。その平成10年から現在に至るまで、私たちは本当に恵まれた環境の中で練習を続けさせていただいています。まさに感謝しかありません。

私事ながら、平成20年に岐阜女子大に赴任した際、研究室に案内されて驚きました。東部コミュニティセンターでの練習期間中、岡本理事長のご尽力でお借りしていた「岐響事務局」、まさにその部屋だったのです。岐響の歴史を紡いでこられた先輩方の思いが結び付けたのでしょうか。「ご支援くださる皆様に支えられて活動できていることを決して忘れてはいけない」。こんなメッセージが聞こえてきます。

▲岐阜南市民会館

▲旧岐阜ボウリングセンター

1986年（昭和61年）通常総会において理事長に宇佐見鐵雄氏が就任
1987年（昭和62年）8月／常設練習会場として岐阜ボウリングセンターを借用。加納小学校より移転
1992年（平成4年）6月／定時総会において理事長に岡本太右衛門氏が就任
1993年（平成5年）6月／創立40周年記念事業
藤掛廣幸氏に『交響曲「岐阜」』を委嘱・初演
1996年（平成8年）11月／練習拠点を岐阜ボウリングセンターから柳津流通団地内の空き施設に移転
1997年（平成9年）6月／練習拠点を柳津流通センターから岐阜市東部コミュニティセンターへ移転。事務局は岐阜女子大学の空き教室を借用
1998年（平成10年）12月／岐阜県交響楽団「練習場」の竣工・完成
2000年（平成12年）3月／岐響練習場にて「地域のためのコンサート」スタート
2003年（平成15年）11月／創立50周年記念公演「東京公演」（サントリーホール）12月／「岐阜公演」（長良川国際会議場）
池辺晋一郎氏に「夢の跡へ」を委嘱・初演
2009年（平成21年）5月／創立55周年記念「ウィーン公演」（小松一彦指揮・ムジークフェライン）2011年（平成23年）3月／ファミリーコンサート・東日本大震災復興チャリティコンサート（井村誠貴指揮・長良川国際会議場）
4月1日／「公益社団法人岐阜県交響楽団」に移行設立
8月／岐阜青年会議所創立60周年記念事業 "岐阜の絆" 三千人の第九合唱に協力出演
（井村誠貴指揮・岐阜メモリアルセンター）

岐響ジュニアオーケストラの発足

岐響ジュニアオーケストラ（以下　岐響Jr）は、1984年4月15日岐阜県交響楽団（以下　岐響）創立30周年を機に岐響の育成団体として発足。HP（岐響のHPにリンクあり）もあるオーケストラで、創立39年・37回の定期演奏会を行った長い歴史がある。その沿革は岐響Jr団長によりHPに掲載されている。私は第2回の定期演奏会から参加した初期の卒団生だが、入団当初の岐響Jrは指導者も少なく、また演奏会が年1回ということもあり、自由でのんびりしたオーケストラだった。合宿と称して夏休みに郡上まで行くが、夜は椅子取りゲームや肝試しをやる、そんな時代もあった。そんな岐響Jrも今では、指導者の数も多くなり、毎週土曜日の午後1時45分から4時30分まで、まじめに練習している。ただ岐響に入団している卒団生はそれほど多くない。岐響Jrを卒団しても、大学進学や就職で地元を離れる、「仕事が忙しい」「これから仕事を覚える」ために余裕がないなど、理由は様々だが、音楽から離れる人もいる。岐響Jrを卒団した人たちが、困難を乗り越えてでも入りたいと思えるような魅力的な岐響を作ることが、これからの我々の課題だと思う。

常務理事　浅野　順一

東京公演・ウィーン公演

長年の夢であった「自前の練習場」完成からわずか5年後の2003年11月23日、岐響は「日本一のホール」とされる東京・サントリーホールにおいて、創立50周年記念「東京公演」を実施した。アマチュアの、しかも地方のオーケストラが、この檜舞台に立てることに、楽団員は皆、心を躍らせるとともに、期待に応えるべく技術向上を図った。東京公演は地元岐阜の方々や東京在住の方々で満席となり、大成功を収めた。

夢の東京公演からわずか5年後の2009年5月4日、岐響はオーストリアのウィーン楽友協会ホール（ムジークフェライン・グロスザール）にて「ウィーン公演」を実施した。初めての海外公演であったが、各方面からのご支援・ご協力のもと、舞台どころか客席に入ることさえ一生に一度の夢とされる「世界一のホール」での演奏会が実現した。ウィーン公演は日本からの観客に加え、多くの地元の方々にもご来場いただき、黄金のホールは満席となり、こちらも大成功であった。

どちらの公演も新聞や地元情報誌等に掲載され、華々しく幕を閉じた。ここに至るまでの数々の困難を乗り越え、支えていただいた岐響の役員、会員の方々、また楽団員の演奏活動を理解してくれる家族をはじめとする多くの方々へ改めて感謝するとともに、短期間にいくつもの夢を実現させていただいた恩返しのため、岐響は一層のレベルアップを誓い、次のステップへ踏み出すこととなった。

常務理事　山田　哉

2013年（平成25年）4月～12月／創立60周年感謝公演（県内4市町村）
11月　創立60周年記念公演（井村誠貴指揮・長良川国際会議）
2018年（平成30年）12月／創立65周年記念公演（指揮：松尾葉子　ピアノ：上原彩子　愛知県芸術劇場コンサートホール）
2020年（令和2年）2月より新型コロナウイルス感染拡大防止のため活動を休止
2021年（令和3年）1月／「コロナに負けるな！コンサート」で演奏活動再開／70周年記念に向け、ナナゼロプロジェクトの立ち上げ
2022年（令和4年）6月／定時総会において岡本太右衛門氏は名誉理事長に、理事長に矢橋修太郎氏が就任
2023年（令和5年）8月／創立70周年記念公演（第99回定期演奏会）（指揮：井崎正浩、ヴァイオリン：辻彩奈　他　愛知県芸術劇場コンサートホール）

▲創立55周年「ウイーン公演」

▲練習場完成（外観）

▲創立60周年記念公演

▲創立50周年「東京公演」

創立60周年記念公演

創立50周年では東京サントリーホール、55周年ではウィーンのムジークフェラインという、日本と世界の最高峰、アマチュア重鎮の場所で演奏する機会をいただけた岐響だが、次の周年事業をどうするのか？という大きな問題にぶつかった。そのとき、楽団員から出てきた意見が「我々が今こうしていられるのは、地元岐阜の方々のいろいろな支援のおかげ。改めて地元の方に感謝したい」…そうして最初に企画されたのが、これまで岐響としてお邪魔したことがなかった御嵩町、白川村、美濃加茂市、笠松町に演奏に伺い、60年間で岐阜県内全ての市町村に岐響として何らかの足跡を残す、という「感謝公演」の試み。そしてもう一つが、アマチュアではなかなか取り上げる機会のないマーラーの大作、交響曲第2番「復活」を演奏した記念公演の開催である。金管バンダ、オルガンを含む超大編成オーケストラに2人のソリスト、合唱が加わり「我々は生きるために死ぬのだ」という歌詞に、感動的な音楽で壮大なフィナーレを築きあげる。弦楽器では感動から泣きながら演奏している奏者もいたが、我々金管奏者はキツいパッセージの連続で、唇の痛みに涙しながら演奏した。

両公演を通じて、これまで岐響の運営に携わってきてくださった方々、応援してきてくださった方々へ、大きな感謝の気持ちを込めることができた。

常務理事　木村　哲也

コロナ禍で見えてきたこと

2020年2月22日、常務理事会が緊急招集され、1か月後に予定されていた「'20岐響ファミリーコンサート」の中止を決断した。岐響とコロナの戦いはここから始まった。

第1波、第2波……コロナの勢いは止まるところを知らず、演奏どころか、日常をも止めてしまった。岐響本体の練習は休止せざるを得ず、楽団員はこの機会にと、各自基礎練習に励んだことだろう。しかし、「やっぱりみんなで練習がしたい！」との思いが強くなった。練習再開に向け「練習場使用ガイドライン」を策定し、できうる感染防止対策を講じ、2020年9月に少人数の練習から再開した。この年6月と11月に予定していた定期演奏会はWEB配信も検討したが、「同じ空間で生の音をお届けしたい」という思いから中止とした。翌年1月に岐響会員向けの「コロナに負けるな！コンサート」を活動再開の第一歩とし、奏者間2メートル等の制約の中、開催にこぎ着けた。この岐響本体としての演奏会は感動そのものであった。その後もコロナの大きな波に翻弄され、70周年記念公演の場は当初はアメリカのカーネギーホールであったが、見通しが立たず断念した。

コロナのおかげ（？）で、仲間と一緒にオーケストラができる日常がいかに幸せであったか、また演奏を続けられることへの感謝を新たにした。岐響にとっても楽団員にとっても貴重な経験であった。

常務理事　早川　幸

ナナゼロプロジェクト
～創立70周年に向けて～

令和3年春、2年後に70周年を迎えるにあたり、これまで応援してくださった皆さまに感謝をお伝えするには、岐響の活動を充実したものにすることが最も大切との考えにより活動を開始しました。

平成10年に専用練習場が完成した際、岡本太右衛門理事長（当時）より頂戴した「この練習場は団員が心地よく、趣味を満足させるためにできたものではない。各自の音楽技術を向上させ、聴衆に感動を与えるオーケストラになること、地域社会に貢献し、岐阜県の芸術文化のシンボル的存在に発展することを目標に掲げる。」このお言葉を3つの目標とし、プロジェクトチームを立ち上げ、これを果たすべく2年間取り組んで参りました。

（3つの目標）
・音楽技術向上
・地域社会への貢献
・芸術文化のシンボル（岐響PR）

目標ごとに3つのチームによって取り組んだ内容は以下の通りです。

（音楽技術向上チーム）
○練習の質向上と確実な技術向上
・プロによるトレーニングを増やし、技術のレベルアップやモチベーションアップ。
○団員自身による技術的な向上
・演奏会ごとに目標を策定し、目指すべき方向を共有しての取り組み。段階的なレベルアップができるような工夫づくり。
・本番までの練習内容を前もって決め、見通しを持って練習したり、新たな練習方法を試したりするなど、個々が自発的に練習に取り組める工夫。
・アナリーゼ講座の開講
令和5年7月5日～7日　全3回　西尾洋先生によるマーラー作曲「交響曲第1番」のアナリーゼ講座を開講。座学よるアプローチでその曲のことをよく知り、共有することで一体感のある音楽を目指す。

（地域社会貢献チーム）
○「こんにちは！岐響です」コンサートの開催
令和4年10月　揖斐郡大野町総合町民センター
令和5年4月　ぎふ・ワールドローズガーデン雅ホール
＊「こんにちは！岐響ですリラックスコンサート」として野村証券様との共催
○岐響まちかどコンサートの開催
令和3年11月　岐阜市役所メディアコスモス前広場
令和4年9月　長良特別支援学校
令和4年11月　美濃加茂市文化会館（かも～る）ドリームコンサート
令和4年12月　アクティブG
令和5年3月　岐阜かかみがはら航空宇宙博物館
○青少年育成についての活動（2023岐響ファミリーコンサート）
・「あつまれ、ちびっこソリスト」の実施
県内の年中～小3のバイオリンを習っている子を対象として公募し、15名がちびっこソリストコーナーにてゴセック作曲「ガヴォット」でオーケストラと共演。
・指揮者和田一樹先生に岐響ジュニアオーケストラの指導と指揮を依頼。
・岐響ジュニアから募集したメンバーとエルガー作曲「威風堂々第一番」にて合同演奏。

（岐響PRチーム）
○岐響紹介リーフレット作成
各種演奏会にて配布の他、若い音楽愛好家に岐響を紹介するため東海地区の音楽科のある学校や、学生オーケストラを中心に配布するなど、積極的なPR活動。
○70周年記念シンボルマークの公募及び決定
SNSなどを通じて全国に公募したところ、32作品もの応募があり、団員による厳正な審査により決定された。シンボルマークは岐響の各種印刷物やピンバッジ制作に使用し、70周年に向けての活動を統一的なものとし、気運を盛り上げた。
○各種SNSを通じたPR活動
Facebook、Twitter、Instagramを利用し、練習日記やコンサートのPR、実施したコンサートの報告など週1回ペースで更新。SNSの発信によって、新入団員の増加や、演奏会の集客増に手応えを感じられた。

この2年間の活動ほぼすべてはコロナ禍でのものでした。練習中止や活動制限、やむを得ず予定通り出来なかったことも多く、やり切れない思いを抱えながらの活動期間が長く続きましたが、こうして晴れて今日の日を迎えることができ感慨もひとしおです。これまで行ってきたことが、本日の演奏に少しでも表れていましたら幸いです。

そして、ここをひとつの通過点とし、地元に愛されるオーケストラを目指して引き続き努力して参ります。今後とも岐響をよろしくお願いいたします。